

ペロポネネーソス戦争期における農地への意識*

佐藤昇

I 問題設定

1 問題の所在

2 考察の方法

II 文献史料からの検討～書かれたことから読み取れるものとは

1 トゥーキューディデースの報告

a: 農地破壊作戦のもたらすもの

b: アルキダーモス戦争

c: デケレイア戦争

d: 史料としての『戦史』が伝えること

2 法廷弁論のレトリック

3 喜劇の持つイデオロギー

III 結論と展望: 同時代の意識、戦後の意識

I 問題設定

1 問題の所在

古典期以降のアテナイ史を研究する上で、ペロポネネーソス戦争¹は一つの大きなテーマである。外交・内政は勿論、社会・経済の諸局面でこの戦争を無視して語ることはできない。とは言え、殊に社会・経済分野に関しては、ペロポネネーソス戦争が一体何をもたらしたのか、十分吟味した上で議論されることは少なかったと言って良い。この戦争を便利なブラックボックスとして利用し、理想的かつ強大であった5世紀²のアテナイがこの戦争によって、社会的にも経済的にも衰退・没落の途を辿ったという歴史像を描くものも少なからずあった。中でも、農地に対する影響については、その当該社会における重要性が否定し得ないにも関わらず、従来ほとんど正面から取り上げられることはなく、被害の大きさを自分の論旨に沿うように解釈し、ペロポネネーソス戦争を都合の良い説明概念として用いる程度のものが多かった³。アテナイの経済基盤は、交易や手工業の発達した古典期においてすら、農業経済にあると言って良い。経済的な面のみならず、アテナイ市民の多くが農業に携わっていたであろう事、そしてそれ故都市以外の生活の場が重要な位置を占めていた事⁴を考えれば、この問題の社会的な面での重要性は明白である。

そうした中、Hanson 1983 の論考は、ペロポネネーソス戦争中の農地破壊がアッティケー農業に与えた実害に焦点を絞り、戦争のもたらした影響を本格的に論じている。彼の論考は、考古学の研究や文献史料から多角的に検討した、当時の戦術や農業事情からの議論である。彼の論点はおおよそ以下の通り。まず、農地破壊に関するギリシア語(δηρώ, τέμνω, κόπτω など)からするに、実際の農地破壊には主として穀物・果樹の伐採という手段が採用された(pp.13-20, 28-30)。この作戦は大抵、密集戦隊から離れると弱く、平地戦向きの重装歩兵ではなく、軽敏な軽装兵の小集団による組織性の乏しいものであった(pp.21-2)。アッティケーの穀物及び果樹の作付け面積は決して小さくはなく、

上述の如き集団では局地的にこそ被害を与えられようが、全土への被害は考え難い。また根こそぎにするには道具など技術上の問題や耕作用果樹の強靱さなど困難さが伴い、局地的にすら長期的影響を与えるものではない(pp.47-9, 51-8)。これ以外に想定される穀物踏みつけ作戦も同様で、人的・時間的損失を考慮すると、両作戦とも農地全体に長期的影響を及ぼすほどの被害は生じない(p.45)。放火作戦も可能だが、これに関する記述も少なく、実行したとしても、生木の着火し難さ(穀物も同様)故に有効とは言えない。果樹の場合には樹木の間隔が火の回りを妨げるものとなった(pp.42-4, 47-8, 57, cf. Hanson 1989, pp.33-4)。オリーブ樹などは焼け跡の中から蘇る生命力も考慮に入れるべきである(pp.52-4)。具体的戦術の効果の低さに加え、敵地遠征は一般に比較的短期間である上、作物ごと・農地ごとの収穫時期が一致しないため、戦略上与え得た農業全体への被害は僅少であった(pp.30-5, cf. Foxhall 1993)。加えて、アテーナイ側の対抗措置も、殊に騎兵による迎撃は、軽装兵集団に対して有効であり(pp.103-7, cf. Spence 1990)、また「疎開」作戦⁵も有効であったと考えられる(pp.87-102)。総じて、實際上農地に長期的影響を与えるほどの被害をもたらすことは困難であり、対抗措置も十分であった。故に、ペロポネネーソス戦争はアッティケー農業に対してほとんど実害を加えることはなく、影響もなかった。

Hanson 説はその後、基本的に受け入れられ、幾つかの点でこの説を補強する論文も提示されている(e.g. Foxhall 1993, Spence 1990)。しかし、彼の論も多くの問題を含む。例えば、戦争前後における農業のあり方の連続・非連続を示す史料がない状況において、影響の有無を論ずるのは単なる可能性の推測でしかない。史料操作にも疑問が残る。年代的整合性を欠く考古学史料を提示し(p.73)、あるいは悲喜劇からの記述を無批判に事実として抽出する⁶。更に、史料の一部は個人的な経験に基づいている(p.57, n.60)。論理的整合性を欠くところもある⁷。そして何より問題は、彼が描く「被害」にあると筆者には思われる。無論、史料から我々現代人の価値判断の基準に従って、被害の程度を判定することは可能である。だが、何らかの事件があった場合、これを被るのは当該社会の同時代の人々であり、彼らは、自身の価値基準に従って評価、対応をしていくのである。彼らにとって影響があれば被害があるという事になろうし、彼らの価値判断に従って無意味であれば被害はないということになる。とすれば、我々はここで、当時のアテーナイの人々が自らの価値基準に従って評価を下し、その価値認識の枠組みに従って表現したもの(これを以下、意識若しくはイメージと呼ぶ)を探っていくことで、ペロポネネーソス戦争がアテーナイ社会にとって如何なる意味を有したかを考察せねばなるまい。

2 考察の方法

上述のような問題設定の下、如何なる史料をどのように扱っていくべきか。社会には当然、その時代・その社会ごとに先験的な価値判断の枠組みが存在するはずである。後代の史料は、記述された事件が発生した時代ではなく、その史料が書き記された時代に特有の枠組みに従って記述されることになる。従って、そうした史料からの考察は、その史料が記述された時代の価値認識のあり方を探ることになる。本論は、ペロポネネーソス戦争が、同時代のアテーナイ社会に有した意味を探ることが目的である故に、時代のズレがもたらす価値認識の差異を排除するため、史料は時代的にほぼ同時代と言えるものを対象とする。次章では、トゥーキューディデース、リュウシアースによる法廷弁

論、アリストファネスの喜劇を史料とする。

勿論どの史料に現れるイメージや意識にも、発話主体が存在する。これらを個々の主体に個別に帰すとすれば、個人の思想探求になり、アテナイ社会にとって如何なる意味を有したかという観点から外れることになる。だが、イメージや意識というものは、ある価値認識の枠組みによって評価され、表現されたものである。受け手の存在を想定して発話をなす状況では、表現する側は受け手と共有の価値認識の枠組みを利用せざるを得ない。伝達内容はともかく、表現方法としてこの枠組みを利用せずには、伝達も表現も不可能という事になる。とすると、受け手がごく狭い対象であることを想定しているのではなく、その時代の当該社会にとって先験的な価値認識の枠組みを共有している集団を受け手として想定しているのであれば、そうした条件でなされる表現は、当該社会に同時代的に共有された枠組みを利用していることになる。故に、表現方法の読解により、当時の当該社会の心性を探ることは十分可能である。実際、大抵の言説は伝達の意図があると思われ、殊に本論で扱う法廷弁論や悲喜劇の類は、後述の如く、明らかに受け手を意識している。すなわち、受け手が同一の先験的な価値認識の枠組みを有している限り、そこに含まれるイメージはその集団の価値認識を無視して語ることは不可能である。時に過剰な偏向や歪曲もあるが、それすらも、受け手を意識したものであることを考えれば、事実の伝達という目的でのみ語られる場合以上に明確に、受け手である集団の価値認識に従ったものと理解される。故に、イメージを読み解くという方法での考察は、古代のアテナイ社会の研究においても可能である。以下では、同時代の文献史料から、語られる場所や対象、語られる(内容ではなく)方法に注意を向けつつ、その時代の当該社会が有した意識を探っていく。

II 文献史料からの検討～書かれたことから読み取れるものとは

1 トゥーキューディデースの報告

最初にペロポネネソス戦争に関する基本史料であるトゥーキューディデースから、ペロポネネソス戦争期におけるアッティケーの農地破壊に関する記述を考察していく。

a: 農地破壊作戦のもたらすもの

開戦直前、ラケダイモーン王アルキダーモスは、配下の遠征軍に対して訓辞を述べる。「我ら(ペロポネネソス同盟軍)がその地(アッティケー)を荒らし、彼ら(アテナイ人)の財産を破壊するのを目の当たりにすれば、彼らは迎撃するに及ぶであろう(2.11.6. 括弧内筆者)」。この演説は、兵士の士気を高める一方、細心の注意をすべく促すものであるが、その中で、自軍が農地破壊を採用すること、これに対して敵方の対抗措置であろう事が注意されている。ここで注目されるのは、採用した作戦と想定される反応との間に何の説明も差し挟まれることなく、両者の間には自明の因果関係があるかのように記述されていることである。すなわち、農地の破壊は敵方の迎撃を必然的に導くものであったということが想定される。確かにこの記述自体は史家によるものであるが、そのナラティブ⁹は一般の兵士に対する訓辞を垂れるアルキダーモスであるのだから、その発話状況からして、この発言が限定された集団内だけに通用する自明性に支えられているとすることはできない。とするならば、少なくとも当時のペロポネネソス同盟の(そしておそらくは史家を含めたヘッラス人¹⁰一般の)意識の中で、このような戦争形態が広範に共有されていたことを示している¹¹。

一方、アテーナイ側に関しても同様の自明性の存在を示唆する記述がなされる。アテーナイの将軍ペリクレスは、デーロス同盟と自軍の海軍力を信頼し、中心市域外の農地へ合戦に討ってでない、いわゆる籠城作戦を採用する。ところが、自分と敵軍の将アルキダーモスとのクセノス関係のために自分の農地のみが敵軍の破壊の手を免れる可能性を有し、アテーナイ市民内部に誹謗中傷が生じかねないと危惧した彼は、「アルキダーモスは自分にとってクセノスではあるが、しかし(それで)ポリスに禍を生じることにはなるまいし、もしも敵方が自分(ペリクレス)自身の土地や家屋を、他の人々のもの(を破壊するの)と同じほどには破壊しないようなことがあれば、それら(自分の土地や家屋)を手放して公共のものとする故、それらから自分に対する如何なる疑惑の念も生じないように(2.13.1. 括弧内筆者)」と、民会場で訴え、市民たちが自分を非難せず、冷静に籠城作戦に従い、合戦に討ってでないよう指示する。ここまでの発言をせざるを得なかった背後には、農地破壊作戦が当然の如く生じ、そしてこれは決して座視し得るものではないという意識があったのではないか。籠城作戦遂行に不可欠な市民たちの冷静さ、一致協力を保持するために、尽力する指導者ペリクレス。裏を返せば、市民たちにそれだけのパフォーマンスをしなければ、農地破壊のもとらす精神的動揺故に籠城作戦遂行は不可能であるという事になろう。すなわち、市民たちが指導者非難をする可能性があったということは、当時の多くのアテーナイ人にとって、農地破壊作戦がそれだけで十分な被害をもたらすものであると意識されていたものであることを物語っている¹²。更に、農地破壊による被害をより一層強く意識したであろう事が伺い知れる記述もある。史家によれば、アテーナイ市民は中心市外での田園部における生活に慣れ親しんでおり、籠城作戦に際して土地に対する愛情が格別のものとなったという(2.14.1-2, 15.1, 16.1-2)。史家がこのような記述をするということは、アテーナイ市民が田園での生活に慣れ親しんでいた分だけ、実際に農地に被害が生じた場合、大きな精神的影響を受けるものであったという事を暗示しているのではあるまいか。従って、これまでの記述から示唆されることは、農地破壊による被害は一般的に甚大なものになり得たという事を、同時代の(少なくともアテーナイの)人々が意識の中で共有していたということである。

b: アルキダーモス戦争

実際のアッティケーでの農地破壊に関する記述は如何なるものであったのか。第1次のアルキダーモスによる侵攻に関しては、市内の喧噪状況までも詳述し(2.18.1-20.4, esp. 21.1-2, 22.1)、第2次侵攻については、「(アッティケーの)全土を荒廃に帰しめた」と評価し(2.47.2, 55.1-2, 57.1, 59.1-2)、全般に大きな被害が生じ、市民たちが無秩序状態になったと記述している。破壊作戦の具体的手段や害を被った範囲については詳述がなく、実害に関しては明確さを欠くが、市中の混乱状況の記述から、実害はどうあれ、意識の上では被害の大きさは相当のものとイメージされていたと推測される。第3及び第4次侵攻に関しては(3.1.1-3, 3.26.1-4)、取り立てて市内の喧噪に関わる記述は見あたらない。しかし史家は、一度記述した記事について、その後記述する類似の事例は簡略化する傾向が指摘されている(Hornblower 1987, p.41)。とすれば、アルキダーモス戦争期後半に関しても、前半同様の不和や内紛状態が十分想定できよう。僅か1年半後の第5次侵攻に関してのみ、被害が小火の内に鎮まったと表現されていることと比較すれば(4.2.1, 6.1)、なおさらその他の侵攻がそれなりの被害をもたらし、市民に影響を与えたという事は考え

うることである。このような内紛状況は、市民たちが被害の甚大さを意識していた結果であろう。すなわち、被害が甚大なものであり、更に拡大するであろうからこそ、市民たちは反撃を主張し、あるいは和平を望み、いずれもボリスとしての作戦を遵守できないことになったのではあるまいか。従って、この時期、アテーナイ市民が農地の破壊を十分大きなものと認識していたであろう事が推測される¹³。

c: デケレイア戦争

ペロポネネーソス軍のデケレイア常駐以降、市外的全領土がアテーナイ人の手から剥奪され、農地に間断無く破壊作戦が実行された上に、失われた奴隷や家畜も膨大な数に上り、籠城中の市民たちは全くの疲弊状態に追い込まれてしまったと、史家は記す(7.18-19, 27-28)。ここでも破壊活動の詳細は伝えない。その程度については、アルキダーモス戦争期と比較し、被害も甚大で、アテーナイの戦力を衰退せしめた主因とまで評している(7.28)。被害自体の記述に加え、アッティケーの農地がペロポネネーソス軍によって荒廃に帰す様子は、アテーナイ市民の目に映り得たとの記述も見られる(7.19.1)。籠城期間も長期に渡り、農地から閉め出されたまま、土地の破壊に対して何ら手出しし得ない状況にあることを考慮に入れば、破壊活動が目の前で繰り広げられることに対して市民たちが冷静でいられるはずもなく、むしろその視覚的效果により市民たちの間で被害意識が高まったであろう事が推察される。

d: 史料としての『戦史』が伝えること

以上、トゥーキューディデースの伝えるアッティケーの農地に対する被害について考察してきた。総じて、第一に農地の被害は、史家の判断に従えば、甚大なものであったという事が、第二に、アテーナイ市民たちもこれに対し冷静ではいられなかったという事が記述されていた。

無論、史家の記述をそのまま真とすべきではない。農地の被害、市中の喧噪、何れも記述された規模を事実とするのは楽天的である¹⁴。他方、記述にない時期や地域について被害なしとするのも危険である。確かに彼は極力風聞に惑わされず、客観性を保つべく入念な吟味の後に著したと記している(1.1, 21-22)。しかしこれは態度表明にすぎない。個々の史実の書き漏らしや誤認もある。それ以前に彼は書物の執筆者であり、事実の認識、判断、評価、そして叙述に際しての取舍選択は、全て史家の手に委ねられる。故に、如何なる記述に関しても彼の個人的思想や事実認識のあり方が反映することになる。

しかし、彼が一般のアテーナイ市民と価値観や認識の枠組みを共有していないと言え、ばこれもまた偽りであろう。彼のアテーナイ市民としての生活経験がそうさせないはずはない(cf. Hornblower 1987, pp.1-6)。『戦史』全体の叙述方法もこれを支持する。例えば彼は、記述の要所に弁論を配している。弁論は後述の如く、聴衆に対して説得的アピールを行うものである故、記述中でのこれらの利用は、想定される受け手(ここでは読者)が受け入れられる論理構造や価値観を含む事を示す。また、当時アテーナイ人たちが享受していた喜劇の語りの影響も指摘されている(ibid. pp.34-6, 45-109, esp.35, 66, 107)。史家が同時代のアテーナイ人と同様の論理構造や価値観を、幾分のずれを含みながらも、共有していることは疑いない。では、農地に関する記述については如何か。史家はデケレイア戦争に至って後、この時期の被害の大きさと比較し、アルキダーモス戦争中の被害に関する自己評価が過剰であったことを明らかにしている(7.27)。他方、籠城中の市民た

ちが農地被害について冷静に対処できずに、「秀逸無二の」指導者ペリクレースの指示を忘れ、ある者は怒りに駆られ強硬策を主張し、またある者は恐怖から和平案を訴え、さらには両派による内紛が発生し、それに端を発して市内が無秩序状態に陥る様子を、史家は描く。史家自身が下方修正する以前の評価は、こうした市民たちの被害意識と相通じるものではないか。両者とも、農地被害に関し冷静な判断を下せず、明らかな過剰反応を見せていることが史家自身によって明らかにされている。この事から、彼の農地被害の記述は、被害そのものにせよ、それに由来する市民たちの反応にせよ、アテーナイ市民と共有された価値観や事実認識の枠組みに従ったものであると考えられよう。従って、アッティケーの農地に甚大な被害が生じたという意識が、広くアテーナイ人たちの間で浸透していたという事になる。

では、こうした意識が共有されていたことを証明するために、その他の史料に目を向けることにしよう。

2 法廷弁論のレトリック

まず法廷弁論中の農地被害に関する記述を考察する。ここではペロポネネーソス戦争中ではなく、戦後間もなくの作品ではあるが、戦中の農地破壊に関して多くの言辞を費やしているリュウシアース第七弁論を題材とする。これは、397/6年に聖オリーヴ樹伐採で告発された被告による弁明演説である。

被告は、平和回復後自分が問題の農地を入手した時点でそこに聖オリーヴ樹などなく、告発自体が自分に無関係であるとして、以下の如く主張する。「といいますのも、戦争が原因となって生じた災厄の内、彼方のものはラケダイモン人たちによって損壊され、此方のものは友人たち(民主派)によって略奪されていたという事を、あなた方は皆ご存じなのですから(7.6)。」すなわち、戦争中の被害の結果既に問題の樹木は損失しており、これは自分の責任外であると論ずる。更に、戦時中は皆、自らの私有地すら監視できずにいたのだから、当時公有地であったこの土地が被害にあったとしても当然と説く(7.7)。つまり、戦時中は公有と私有を問わず、監視も不十分であったが故に、農地に相当の被害が生じたというアピールを自明であるかの如くに用い、自論強化を目論んでいるのである。続けて、聖オリーヴ樹の管理を行うべきアレオスパゴスの評議員たちも「かつては、個人のオリーヴ樹も聖なるオリーヴ樹もたいていは繁茂していたが、今や多くのものが切り倒され、大地が裸にされてしまった」事を熟知していようと主張する(7.7)。戦争中の農地破壊、殊に樹木の伐採が甚大なものであるというレトリックを用い、問題のオリーヴ樹も伐採されていたとすれば、この戦争の犠牲となったに相違なく、告発自体が自分の与り知らぬ処であると主張しているのである。

この被告の主張は果たして事実なのか。自己弁明、しかも敗訴の場合、国外追放・財産没収という厳罰が待ち構えている状況(cf. Carey 1989, p.115)であれば、戦中の被害を過剰に訴えて自己責任を回避せんとする意図は十分にあり得、事実歪曲の可能性はある¹⁵。しかし、自己正当化のため、すなわち陪審者たる聴衆の共感を得んが為に用いたレトリックが、当時の(陪審者たちを含む)社会の価値観・通念と大きく外れることがあろうか。被告の弁明戦略は、樹木の損失を戦争の被害に帰すこと、告発されている犯罪はハイリスク・ローリターンであって自分が犯すはずもなく、しかも原告側の告発には手落ちがあると主張することである。証明できれば最も有効になるであろう戦略は、明らかに第一

のものである。聖オリーヴ樹の損失を自分とは無関係なものとすべく利用した「戦時における農地の甚大な被害」というレトリックが、聴衆に共有された意識に支持されないとすると、すなわち、被害そのものが軽度であると聴衆が意識していたとすると、問題の樹木も被害を被る可能性が低かったと認識されることになり、説得のためのレトリックとしては全く機能しない。ここから、聴衆であるアレイオスパゴス評議員たちの間でこうした意識が共有されていたことが導かれる。更にこの弁論では、弁明戦略の根幹である「戦時における農地の甚大な被害」の事実関係に関して、陪審者たる評議員自身に証明を委ねている。すなわち、この件に関しては取り立てて証人も詳しい説明も不要であるという状況が推察される。戦時における当該の農地での被害について何らかの形で証人を立て、あるいは説明を加えた方が無実も明確になり、逆にそれらが無いことが疑惑の種にもなりかねない。にも関わらず、詳しい説明もなしに重要な事の実偽を陪審者に委ねられる状況は、戦時において農地に甚大な被害があったことが陪審者たちの間で共通理解として存在していた事を示す。従って、少なくとも陪審者たるアレイオスパゴス評議会の評議員たちには、農地の被害意識が共有されていたと結論づけられる。

ところで、この評議員たちの価値観は、多くのアテーナイ市民の価値観と如何なる関係にあったのであろうか。アレイオスパゴス評議会の評議員は、広義のアルコーン経験者からなる。462年のエフィアルテス改革以降、アルコーン就任資格が第3身分である農民級にまで引き下げられたこともあり(Arist.*AP*25.1-4; 26.2 cf. Rhodes 1981, pp.145-6, 330-1; 事実上は最下層のテーテス級まで拡大したとも考えられている)、抽籤によって選出されるアルコーン、そしてその経験者からなるこの評議員たちは決して狭い層に限定されるわけではない¹⁶。更に、彼らは下層民の敵対心的であったというよりも、尊敬の念を示される立場にあったと考えられている(Wallace 1985, p.126 ff.)。このような存在であると考えれば、この評議員たちが少なくともこの時代、中小の市民の価値観と対立した存在であるというよりむしろ、幅広い市民の規範、価値観に通じており、当該社会のイデオロギーを体現している存在と考えられる。従って、上述のような意識は、決して広大な土地を持つ富裕民たちの閉じた世界の中で膨らんだ妄想ではなく、より広い市民たちに共有されていたものと考えられる。では次節で、より広範な市民の間に共有された喜劇に目を向けることにする。

3 喜劇の持つイデオロギー

悲喜劇などの作品は、その性格上、当然創作に富むものであり、現実の世界を反映する必要もなく、神話や架空の世界を舞台としているものが多い。実際、神話的題材をモチーフにする悲劇は勿論の事、喜劇もしばしば筋そのものは、決して実社会を反映しているわけではない。このような作品であれば、その記述を無批判に事実として抽出してはならない。しかしながら、その作品に含まれるレトリック・イデオロギーの中には現実社会の価値観を反映しているものがあることもまた事実。とりわけアリストファネスが描き出す喜劇は、現実の社会状況を物語の背景として設定し、特定の社会、ここでは作家が生きたアテーナイ社会(cf. Starkie 1968, xi ff.)を舞台としていることから察するに、全くの創作であったり、人間の普遍的テーマを取り扱った時代性を超越した作品であるというより、当該社会の同時代的な問題を浮き彫りにした作品と見るべきである。しかも民主政下における喜劇は、市民団内部の多様な価値観を提示し、政治決定以外の場

での世論形成を促す公共空間であるとも考えられている (cf. Carey 1994, p.75)。とすればなおさら問題そのものも、これに対して提示される価値観も市民団が有するものということになろう。更に、当時のアテーナイの喜劇が、現代の小説や映画に劣らず、受け手、ここでは観衆を意識していたことは疑いを容れない。当時の喜劇は、事前審査がなされた後に、ポリスの公式祭儀において観衆の眼前で競演され、競演の結果、観客である市民たちの投票によって順位決定がなされるものであった。また喜劇では、しばしば政治的有力者に対する揶揄がユーモアの一形式として用いられているが、これを可能にするために喜劇作家は市民団を一種のパトロンに据えているのだとも考えられている (ibid. p.59)。以上を考慮すれば、喜劇の記述は市民寄りの、つまり市民たちの感情に訴えるだけの記述をしているという事になり、市民たちの価値観を反映して記述せざるを得ないということになる。また、公式祭儀において人に見せるべく演じられ、さらに観衆の多くが(非市民が含まれていても)不特定の市民であるという事自体、その場にいる不特定の人々の共通の価値認識の方法に従って、すなわちその母集団である市民社会の価値観に沿った形での演技、ひいては作品の叙述が当然なされていたという事を示唆する¹⁷。従って以下では、アリストファネースの喜劇を、観衆として想定されていたアテーナイ市民の価値観を十分に反映しかつ代表したもの、イデオロギーを映し出すある種の鏡として考察していく。

まず最初に題材とするのは、425年のレーナイア祭において上演され、第一位を勝ち取った『アカルナイの人々』である。舞台はアルキダーモス戦争中のアテーナイ。ラケダイモン勢によって葡萄島を蹂躪されたアカルナイ区の老人たちは、そんなことにはお構いなしに個人的な平和を取り結ぼうとするディカイオポリスを非難し、和議を止めぬ場合には彼を石で打ち据えようと襲いかかる。老人たちは言う。「きゃつこそは、おおゼウス大神はじめもろもろの神々、敵と和議した憎い奴。わしらときたらその敵の腹立ちまぎれの戦いを、荒らされた地所のそのゆえに、いよいよ激しく仕掛ける覚悟だ。そして尖って痛みの激しい葦……のようにぐさりと奴らにつき刺さって、わしらの葡萄島を踏みにじるのを止めさせぬうちは、どうして、戦さの手を緩めるところか。何はともかくきゃつをば探して、石打村の方に目を配り、見つかるまでは山を越え谷を涉っても追いかけようぞ。こんな男にゃどれだけ石を投げたとてわしの腹はおさまらぬ(204-35、村川訳)¹⁸。」これに対し、ディカイオポリスは自分の樹木もまた被害を被ってはいるが、戦争継続の方が賢明ではないと演説する(512)。この演説に承服しかねた老人たちの半数も、この後、ディカイオポリスが個人的な平和を享受する様に羨望の眼差しを向ける一方、酒乱の神として表現された「戦争」に対する愚痴を並べ立てる。その中で彼らは「戦争」が「ひとしお猛ってわしが島の杭に火をつけ、葡萄の木からは、無理無体に酒を搾る」と漏らす(985-6、村川訳)。ここは、戦争中に葡萄園の支柱に放火がなされ、更に葡萄樹に何らかの被害が生じたことを暗示している。説得されていた方の老人たちも、平和になれば楽しい暮らしが待っており、楽に樹木の世話ができるのだと述べる(990-9)。戦争からの隔離という条件によって生じるであろう農耕への復帰を希求しているのである。アカルナイ区はトゥーキューディデースの記述にもあるように(2.21.1-2)アルキダーモス戦争中最初に大きな被害を被った地域で、記述された区民の冷静でない様もこれにほぼ一致する。したがって、市民たちの間に、戦争による被害が十分な精神的影響を与え得るほどのものであったことを、この喜劇の記述は、絵空事としてではなく、(デフォ

ルメしていたとしても)実際にあり得る状況として物語っていると言えよう。

また個々の記述から離れて、全体的な文章構造からこの喜劇を見た場合、ディカイオポリスに代表される和平論と、アカルナイの老人たちに象徴される主戦論に分かれている事が分かる。上述したように、こうした状況は、市民間のイデオロギーのずれや対立を叙述の軸として描写されているのである。ポリスやデーモスに相当する人物が登場していないのも、市民の間で一体的な思考を持つに至っていないことの証左であろう。つまり、作品全体が市民間の混乱状況の見取り図となっているのである。更にここで論ぜられる、和平希求をする側も(512, 989-99)、報復攻撃を主張する側も(204-35)、両者ともその背景として戦争による農作物への被害が描かれているという事は注目すべきである。すなわちこの喜劇は、同時代のアテナイ市民の多くが有していた農作物への被害意識を反映し、代表していると言えるであろう。

別の作品においても関連した記述が現れている。それはニーキアースの和約の前年に当たる421年、都市のディオニューシア祭で上演され、二等賞を獲得した『平和』である。この作品は、アテナイの農民トリュガイオスが、長引くペロポネネーソス戦争を止めるべく、神々の世界へ飛び立ち、女神「平和」を連れ出して、平和を回復するという作品になっている。この喜劇中にも、主人公がヘルメースから戦争の原因を聞き出す中、葡萄樹や無花果の木の被害に関する言葉が台詞に上り、戦火が農民に降り懸かったことが描写される(612, 628 ff.)。記述そのものに加えて、被害意識の高まりがあったことを効果的に示しているのは、その描き方である。戦争の政治的経緯に対して全くの無知で、ヘルメースの説明も馬の耳に念仏であった農民が、被った被害については自ら主張している場面は、鮮明なコントラストをなしており、観衆であった市民たちの目に印象的に映ったに違いない。無知を笑いの種とされていた農民ですらも、そこにだけは強い意識を持っていたという事を印象づけるものである。この喜劇では、各種の職業に就くものが、アテナイ市民団全体のイデオロギーの諸側面を象徴している(例えば武具関連業者は軍事的な、農民などは農業的な側面を象徴している)と考えられ、農地への被害は、市民団内部の個別の社会集団のものというよりも、当時のアテナイ市民団の価値認識の中で十分強く意識されていたものと言える。

そして、更に注目すべきは、平和回復後の農民たちの描写である。「平和」の女神救出後、農民たちは長い間放っておいた土地に喜び勇んで出向く。再び平和が満ちることになった田園部で、彼らは歓喜とともに農作業に就き、待ちこがれていた饗宴やその他の楽しみを享受する(551-600, 865-869a, 1127-71, 1316-29)。こうした農耕生活の理想状態を喜劇の中で演じさせるということは、喜劇の状況設定とは無関係に、貴族的あるいは農本主義的田園生活を理想化して記述したのではあるまい。アリストファネースが理想化した形で描いているのは、戦争という特殊状況によって農業から隔離された、あるいは被害を被っていた人々が、その桎梏から解放されたことにより、本来自分たちのあった状態、すなわち日常的に農耕に勤しむ事が可能になった姿である。隠された神が復活して豊かさをもたらす構造は、彼らにお馴染みのペルセフォネーの神話と物語の構造を共有しており、上演時期も春先で、観衆に農耕の理想的な状態を容易に想起させたであろう(Bowie, op.cit. pp.142-4)。そして何よりもまず、観衆が戦争や籠城によって農耕から隔離されているという意識、被害を被っているという意識を有していなければ、この喜劇中の重要部分の一つともいえるべき理想的農耕生活のシーンは、観衆(として想定されて

いる多くのアテーナイ市民)に対して訴えかける力の非常に弱いものとなるに違いない。したがって、本節冒頭に記したような喜劇の性格を考えあわせると、上述のような意識は市民団の中に広く共有されていたと考えるべきである¹⁹。

以上、アリストファネスの喜劇中には、農地への被害、そして戦争中の農地からの隔離による農耕生活の理想化が描写されていた。そして、喜劇の性格を考慮に入れるならば、これらが、当時のアテーナイ市民が有していた意識の反映であることが理解される。

III 結論と展望：同時代の意識、戦後の意識

以上、ペロポネネーソス戦争期における農地の被害について、同時代の著述家の手による記述を考察してきた。そこには、農地における甚大な被害の意識と、農地から隔離させられた人々の農耕生活に対する希求が記されていた。これらの史料は、各々吟味してきたように、市民の中のごく狭い層に限定された意識に関する言説であるというよりも、比較的広範な人々の間に共有された価値観に裏打ちされる、若しくはそれらがあって初めて成立しうる言説であるという事が明らかにされた。すなわち、ペロポネネーソス戦争期のアテーナイ社会には、広く農地の被害意識、そして農耕希求の裏側にある農耕からの隔離の意識が、決して無視できないほど広まっていたと考えられる²⁰。以上が本論の結論である。

では、これらの意識の高揚²¹は、戦争期間中のごく一時的な意識の高まりに過ぎないのであろうか、すなわち農地の被害(の意識)が、実害はどうあれ、戦後のアテーナイ社会に何らかの影響を与えなかったのだろうか。以下、展望として本論の結論から推測しうる影響を簡単に考察し、本結論のアテーナイ史の中における意義を考えてみたい。

403年、リュシアースの弁論34番の弁者は民衆に訴えかけた。「我々がヘッラス人を支配していた時分は、アテーナイ人諸君、我々はかくの如き意見を持っていたのであります。そして、立派に評議決定をしたと思い、土地が破壊されるのを座視し、そこで戦闘をする必要があるとは考えずにおりました。……しかし、それら全てを戦争で喪失し、祖国(のみ)が我々に残された今となつては、唯一この危険を冒すこと(＝ラケダイモン人に立ち向かうこと)のみが安全の希望を有するものであることを、我々は承知しているのです。実際、かつては他の不正を被った人々のために援軍を派遣し、敵軍に対する勝利記念碑を他の土地に建立していたことを思い起こし、祖国と我々自身のために勇敢なる人物にならねばなりません、神々を信じ、神々が正義の側に、すなわち不正を被った人々とともにあると思って(34.9-10)。」イソクラテースも、敵の侵入に対するあり方として、ペリクレースの籠城作戦に対する嫌悪感を表明する一方、過去のアテーナイの栄光の戦歴を辿りつつ、伝統的な重装歩兵による合戦を賞賛している(4.58, 85-7; 8.75-7, 84, 92)。このように、戦後のアテーナイにおいて演説された弁論は、明らかにペロポネネーソス戦争時のペリクレーズによる籠城作戦＝農地の放棄を念頭に置いた論が展開され、その中で農地の防衛を訴えかけている。すなわち、今回の戦争の影響の下、アテーナイは農地重視せざるを得ない状況になっているのである。勿論、敗北したアテーナイが和平条約に従ってデーロス同盟を喪失したがため、自国の農業に依拠する率が高くなったという可能性は十分高い(Strauss 1986, p.44, Ober 1985, pp.51-66)。とは言え、戦時中に農地への被害が生じたという意識がなければ、農業を推奨こそすれ²²、農地防衛を訴える必

要はない²³。とするならば、デーロス同盟喪失を契機とした農地重点化と言えど、戦時中の農地に対する被害意識を下敷きにして生じたものと言わざるを得ない。戦後のアテナイ社会において、明らかに農耕に対する意識の高まりが見られ、軍事作戦として農地を放棄せず、敵方の破壊の手から守備すべきであるという意識が見られた。これは、デーロス同盟喪失を契機として発生したものではあるが、農地への被害意識がその背景となっていたと言えるのではあるまいか。

ペロポネネソス戦争中、アテナイ市民は農地の被害に対して強い意識を持っていた。これは、敗戦後、デーロス同盟喪失を契機に生じた農地重視のあり方を促すものとして位置づけることができよう。

参考文献表

[古典文献]

- Aristophanes, *The Acharnians of Aristophanes*, Starkie, M.A. (ed.), Amsterdam, 1968
 Idem, *Aristophanes Peace*, Platnauer, M. (ed.), Oxford, 1964
Hellenica Oxyrhynchia, McKechnie, P. & Kern, S.J. (eds.), British Library Cataloguing, 1988
 Isocrates, *Greek Orators III: Isocrates*, Usher, S. (ed.), British Library Cataloguing, 1990
 Lysias, *Lysias: Selected Speeches*, Carey (ed.), Cambridge Greek and Latin Classics, 1989
 Thucydides, *Thucydides Historiae*, Jones, H.S. & Powell, J.E. (eds.), Oxford Classical Texts, 1942
 Xenophon, *Xenophon Oeconomicus*, Pomeroy, S.B. (ed.), Oxford, 1994

その他の古典に関しては、Loeb版を参照。

(古典史料邦訳)

- アリストパネス『アカルナイの人々』、村川堅太郎訳、ちくま文庫『ギリシア喜劇I』1986収録
 同『平和』、高津春繁訳、ちくま文庫『ギリシア喜劇I』1986収録
 トゥーキュディデース『戦史』、久保正彰訳、岩波文庫、1966

[2次文献]

- Andreyev, V.N., 'Some Aspects of Agrarian Conditions in Attica in the Fifth to Third centuries B.C.', *Eirene* 12, 1974
 Auding, G., 'Über Grundeigentum und Landwirtschaft in der athenischen Polis', in Welskopf(Hg.), *Hellenische Poleis*, Berlin, 1974, Bd.I, S.111-31
 Bowie, A.M., *Aristophanes Myth, ritual and comedy*, Cambridge, 1993
 Burford, A., *Land and Labor in the Greek World*, Baltimore & London, 1993
 Burford-Cooper, A., 'The Family Farm in Greece', *CJ* 73, 1977
 Carey, C. 'Comic Ridicule and Democracy', in Osborne, R. & Hornblower (eds.), *Ritual, Finance, Politics*, Oxford, 1994, pp.69-83
 de Ste Croix, G.E.M., *The Origins of the Peloponnesian War*, London, 1972
 Foxhall, L., 'Farming and Fighting in Ancient Greece', in Rich & Shipley (eds.), *War and Society in the Greek World*, London, 1993, pp.134-45
 Idem, 'The Control of Attic Landscape', in Wells (ed.), *Agriculture in Ancient Greece*, Stockholm, 1992
 Hanson, V.D., *Warfare and Agriculture in Classical Greece*, Pisa, 1983
 Idem, *The Western Way of War*, London, 1989
 Hardy, W.G., 'The Hellenica Oxyrhynchia and The Devastation Attica', *CPh* 21, 1926, pp.346-55
 Hornblower, S., *Thucydides*, Baltimore, 1987
 Michell, M.A.H., *The Economics of Ancient Greece*, Cambridge, 1940 (2nd ed. 1957)
 Mossé, C., 'Le IV^e Siècle', in Will, E. et al., *Le monde grec et l'orient*, Paris, 1975, tome II, pp.7-244

Ober, J., *Fortress Attica*, Leiden, 1985

Idem, 'Hoplites and Obstacles', in Hanson (ed.), *Hoplites*, London & N.Y., 1991, pp.173-96

Idem, 'Civic Ideology and Counterhegemonic Discourse', in Boegehold & Scafuro (eds.), *Athenian Identity and Civic Ideology*, Baltimore, 1994, pp.102-26

Osborne, R., *Demos*, Cambridge, 1985

Rhodes, P.J., *A Commentary on the Aristotelian ATHENAION POLITEIA*, Oxford, 1981

Rosivach, J.V., 'Autochthony and the Athenians', *CQ* 37, 1987, pp.294-306

Roy, J., 'The Countryside in Classical Greek Drama', in Shipley, G. & Salmon, J. (eds.), *Human Landscape in Classical Antiquity*, London, 1996, pp.98-118

Spence, I.G., 'Pericles and the defence of Attika during the Peloponnesian war', *JHS* 110, 1990, pp.91-109

Strauss, B.S., *Athens after the Peloponnesian War*, London & Sydney, 1986

Idem, 'The Problem of Periodization: The Case of the Peloponnesian War', in Golden, M. & Toohey, P. (eds.), *Inventing Ancient Culture*, London & N.Y., 1997, pp.165-75

Wallace, R., *The Areopagos Council to 307B.C.*, Baltimore & London, 1985

Will, E., 'Le territoire, la ville et la poliorcétique grecque', *RH* 253, 1975, pp.297-318

伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』、東大出版会、1982

ジュネット、ジェラルド『物語のディスクール：方法論の試み』、書肆風の薔薇、1985

《註 釈》

* 本稿は平成8年度卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

¹ 便宜上ニーキアースの和約以前をアルキダーモス戦争、これ以降をデケレイア戦争とする。

² 以下、年号や世紀に関しては基本的に紀元前である。

³ 被害甚大説：Michell 1940, pp.85-88, Auding 1974, S.111-4, Mossé 1975, pp.106-7。影響小規模説：Will 1975, pp.301-4, Andreyev 1974, pp.18-19 など。Hardy 1926 は、トゥーキューディデースと他の同時代史料の記述との齟齬を解消すべく、戦争の後半期に大きな被害が、前半期はこれに比べ影響はないとしている。

⁴ 例えば、民主政下で生きる市民たちの生活の基盤が地方社会デーモスにあることや(cf. Osborne 1985)、またアウトクトーンという概念(cf. Rosivach 1987)が大地との結びつきとを無視し得ないことを想起せよ。

⁵ 田園部での破壊作戦への対抗上、都市の城壁内や、島嶼部・山岳部などに生活必要物資や農耕に必要な道具、家畜や奴隷などを避難させる作戦。

⁶ 例えば、pp.52-4 は、悲劇を含むプロパガンダ性を無視して、悲劇中のオリーブ樹の回復力を実際の復興の容易さを示す史料とし(cf. S.O.C.698-72)、p. 135 は、笑いの種として描かれているにも関わらず、何の批判もなく事実としている(cf. Ar.Lys.55 ff.)。

⁷ デケレイア戦争期、農民が田園部で十分に農作業できたと彼は指摘するが、田園部で農業に従事している者がアッティケーの農業に影響を与えるほどの人数であったとした場合、「疎開」の効果は低減し、騎兵の反撃も非効率的で効果が低減する。

⁸ cf. Thuc.2.18.6. 尚、以下特別に断りのない限り拙訳である。

⁹ ジュネット 1985 が言うところの、「語りの水準」。あるエピソードを作中人物が語る場合、そのエピソードは、作中人物が語っている物語の状況とは異なる関に位置することになる。この関をナラティブと呼ぶ。

¹⁰ 本論は現代の国家・民族・地理上の名称「ギリシア」を用いず、同時代人が同じ文化を共有するものと考えていた「ヘッラス」という概念を用いる。

¹¹ 農地破壊から合戦に及ぶ過程を儀礼化された形式的なものに見なし、精神的被害ほど実害はないと考える事も可能(Ober 1991, cf. Hanson 1983; Foxhall 1993)。しかしここでの問題は実害では

なく、同時代人の意識である。この過程の形式性が明確に意識されていれば、農地が蹂躪された時点で合戦に及ぶ必要性も、それに反対する指導者へ非難が発生する可能性も低くなり、史家を始めとする知識人の目には、主戦論や、非難を避けるべく振る舞う將軍の行動は滑稽に映ることになる。ところが、これらに関する史家の記述には、何ら輕蔑や非難の類は見られない。故に、同時代のヘッラス人は、破壊作戦がもたらす農地への被害は十分大きなもので、対抗措置をとる必要があるほどのものと意識していた、とせざるを得ない。

- ¹² 籠城作戦継続の事実から、実際の被害が小火の内に鎮まり、市民もそれを意識していたとの仮定も可能。しかしそれでは、史家による被害や混乱の記述は全体の文脈上無意味なものとなる。作戦の継続自体は、当面の食糧確保や海軍を始めとする遠征軍の勝利への信頼といった要素を考慮すべき。
- ¹³ デケレイア戦争に至って、史家自身今回の被害の評価を下方修正している (7.27, cf. *Hell. Oxy.* 17. 5, Hardy 1926)。しかしこれは、後になって、より大きな被害を被ったとされるデケレイア戦争期における下方修正である。実害ではなく、同時代人の意識を探るに当たって反証とはならない。
- ¹⁴ 実際に当時の一般的な思想と異なる記述もある (cf. Ober 1994)。例えば、僭主殺害の真相 (1.20) や、覇権争いに起因するこの戦争の原因 (cf. *Ar. Ach.* 513 ff., *Pax* 603 ff., *Plut. Per.* 30-32)、更にペロポネネーソス戦争という時期区分そのものも (cf. Strauss 1997)、一般市民の捉え方とは異なるものだった。但し、Hornblower 1987 はこうしたコントラストは稀であるとしている。
- ¹⁵ 殊に問題の聖オリヴ樹の伐採が戦争による被害であるという点については、信憑性が低い。Carey 1989, p.117 の解説は大凡以下の通り。問題の農地は、戦後に公有地から私有地となって、二度所有者が変わり、被告は3人目の所有者に当たる。しかも前所有者はこの土地を貸し出していたのだから、被告以前に少なくとも3名以上の人間がこの土地と関与したことになる。とすれば、彼らを証人として提出するのが最も妥当である。しかし、彼は自分から土地を借りている人物を証人として大量に提出している一方、上述の人物を証人から除外している。ここでは、偶然的要素よりも意図的な操作を想定した方が説得的であろう。ならば、被告が入手後、貸し出し開始以前に伐採した(あるいは貸し出し後に伐採したが、自分と賃借関係にある人物に圧力をかけて偽証させている)可能性が高いと言わざるを得ない。
- ¹⁶ 但し、アルコーンの如く国政に大きく、長く関与する役職にある市民は、生活にゆとりがある、比較的富裕な市民であったとする考えもある (cf. 伊藤 1982, p.91、但し、貧乏で経験に乏しい人物でさえアルコーン職に就いた例も知られている。e.g. [Dem.] 59.72)。しかし、経済的格差が古代のアテナイ社会で現代と同様の意味を持っていたか否かは不明である。また、古代のアテナイでは大都地所有が進展せず (Andreyev 1974, pp.10-11, Burford-Cooper 1977, p.168, cf. Foxhall 1992)、経済的格差が大きくなかったとも考えられる。このような状況で、経済的格差が当該社会にとって如何なる意味を有していたかは、ここでは追求できない。
- ¹⁷ もちろん喜劇中に作家独自の価値観が表明され、それが貴族政志向の価値観と指摘される事はしばしばある (cf. de Ste Croix 1972, pp.231-243, 355-75)。しかし、彼の作品中に現れる価値観は一方に肩入れするというよりも、市民社会の中に存在する複数の対立的な価値観に対して両義的な態度、または中立的な態度を示していることが指摘されている (Bowie 1993, p.9 ff.)。つまり、劇中にしばしば見られる両義的な態度は、市民社会自体の意識が一体的でない様子をそのまま写し取っていると考えられる。また、喜劇の役割とは、民主政社会の根幹である意見の多様性を公式の場で表明することにあると考えられる。政治決定をする場合には最終的に一方の意見に決定せざるを得ない。その一方で、喜劇が世論＝公共性の創出の場であると考えれば (cf. Carey 1994, p.75)、喜劇のイデオロギーは、作家の個人的な主義主張というよりも、市民団の多様なイデオロギーを反映するものと考えて差し支えないのではないだろうか。
- ¹⁸ 訳中「荒らされた地所のゆえに」とあるのは、原文では“τῶν ἐμῶν χωρίων”のみであるが、文

脈上、自分の土地の被害についての意である。「石打村」はパッレーネー区と動詞 βάλλω をかけた掛詞である。cf. Starkie 1986, p.57-8

- ¹⁹ cf. *Ar.Ach.*1089-93; *Eq.*806. Hanson 1983, esp. p.118 は、豊かな生活の描写を、戦時中実際に豊かな食生活を享受できた例とするが、事実の反映である保証はない。文脈上明らかに、平和回復時の豊かさを、時に過剰に、表現したものである。実際のアテーナイ社会が戦時下にあることを考えれば、当時の市民たちが豊かさを享受していると意識していたと言うより、喜劇中の記述は市民が希求する状況を描写したものと考えべき。仮に豊かさの実例があったとして、それをアテーナイの農業状態と結びつける根拠は何もない。
- ²⁰ 尚、伝クセノフォン『アテーナイ人の国制』には、農民と富裕者は土地の被害を心配して敵におもねるが、民衆は自分たちの財産が(市外にほとんど財産がない故に)敵に蹂躪されないことを熟知しており、おもねることなく恐れずに生活しているとの記事がある([X.]*Ath.*2.14)。しかしこの作品は、「民衆」を富裕者や農民と大きく対置し、前者を卑下して叙述している。しかし、多くの市民が農業に従事していたことは広く認められている。また最近では都鄙の区分、土地所有の大小についての差異の認識を小さく見る研究が多い (Strauss 1986, pp.59-63, Osborne 1985, p.142, Burford 1993, pp.223-230)。
- ²¹ 実際、5世紀には比較するだけの史料がないため、ここでは意識の通時的「変化」は論じられない。この時期、戦時下という状況で意識若しくはイメージが明確な形で表現されたことを「高揚」と評するが、これはその可能性の示唆に過ぎない。
- ²² 戦争終結直後に上演された『コロノスのオイディプース』の描写は象徴的。アテーナイの悲喜劇作家は従来、その環境や風土に接しながらも、作品中でそれに言及することが少なかったと言われる (Roy 1996, pp.98-104)。それに比べてこの悲劇は、言葉自体大地や土地に関わるものが多く、それらを比較的詳細に描写し、しかもアテーナイの肥沃さを繰り返し描いている (16-9, 668-710, 1590-7)。これは敗戦後のアテーナイ社会が農地や農耕の復興に積極的姿勢を持っていたことを示唆する。イソクラテースの政治弁論『パネーギュリコス』の中、アテーナイがヘッラス人の指導者たるに相応しい所以として、農業発祥の地たることがアテーナイ市民団に演説されていることからするに (28-30)、戦後のアテーナイ社会が、自国の農業に関して強い意識を持っていたことを伺い知れる。Pomeroy 1994 は、『家政論』など農業書の出現もこの意識の影響と考えている (pp.46-55)。
- ²³ cf. *X.Oec.*4.5 ff., 5.3 ff., 6.6 ff., *Mem.*3.5.27, 3.6.10-11, *Pl.Lg.* 6.760a-761d, *Arist.Pol.*7.1330a11 f